



廣瀬川

第100号

令和3年
8月31日

仙台市小学校長会

発行者／白井 剛次（会長） 責任者／千田 博史（広報部長）

主張

創刊100号に思う

会長 白井 剛次（上杉山通小学校）



昭和48年12月に「廣瀬川」の前身である「会報」の第2号が発行されました。残念ながら創刊号を見付けることができませんでした。昭和48年という年は、仙台市の教育が始まって100年を迎えた年でもあり、その機に、「会報」が創刊されたのではないかと推察します。当時の会長は、その中で、「変動著しい社会にあって、ゆるぎない小学校教育の確立のため精進している私たちです。人事や施設の管理、そして、次代をになう大事な子どもの育成に心魂を傾け、苦悩とよろこびの交錯する教育体験の年輪の中から、じーとにじみでる会員同人のことばをお互いにかみしめたいものです。そして、信頼に結ばれる会員相互の心のきずなを、一層太くすることを念じます。」と提言されています。これは、今も変わらず仙台市小学校長会に脈々と流れる「思い」ではないかと私は思っています。

48年たった本年、「廣瀬川」は創刊100号を迎えることになりました。改めて読み返すことによって、この間の各号に込められた諸先輩方の取組、「思い」や熱意等がしっかり伝わってきます。また、その時代時代に直面した課題にいかに向き合い、いかに克服してきたかを知ることは、私たちにとっての大きな財産となっています。

世が平成になる直前に臨時増刊号が発行されています。政令市「仙台市」の誕生を機に、「新たな校

長会が誕生した」と表現し、そして、「本会はその規模でも結成以来の画期的な組織体として新たな発足をみるようになった」と述べられており、臨時増刊として発行したその「思い」が伝わってきます。30年がたち、今、私たちは現状に合った新たな組織改編に取り組んでいます。平成23年8月発行の第77号からは、「復興へ！学校の力結集！」のテーマの下、教育の復興にける熱い「思い」や様々な取組をつづってきました。今、私たちはその10年を振り返り、次の時代につなぐための取組を行っています。

「人はみな歴史の中継ランナー」。これは、NHK大河ドラマ「独眼竜政宗」の脚本家としても有名なジェームス三木氏の著書の中にある言葉です。この「廣瀬川」こそが、仙台市小学校長会のその時代時代の「思い」や取組をつなぐバトンの役を担っているのだと私は思っています。

私たちは、感染症の中での教育活動という大きな課題に直面しています。また、「GIGAスクール構想」「コミュニティ・スクール本格導入」、「令和の日本型教育の構築」、さらには本市の最重要課題である「いじめ・不登校問題」等、取り組むべきものは多々あります。まさに、今、会員同士のきずなを更に深め、仙台市小学校長会が一枚岩となって、次代を担う子供たちのため、これら山積する課題一つ一つに真摯にそして丁寧に向き合っていきたいと思えます。

内容

○主張	1
○特集「新たな形を模索し、実施する研究大会」	2
○提言「今日的課題に対応した創意ある教育」	3
○学区紹介「地域とともに」	4

○特色ある教育活動	7
○仙台市小学校教育研究会より	11
○退会者からのメッセージ	12
○新任校長所感	20
○編集後記	24

特集 新たな形を模索し、実施する研究大会

家庭科 全国大会

家庭科教育の充実・発展を目指して

家庭科研究部会

部会長 鳩原 淳子 (鶴谷小学校)

仙台市小学校教育研究会家庭科部会は、令和3年10月22日にトークネットホール仙台を会場として、第58回全国小学校家庭科教育研究会全国大会宮城大会を開催する。

本部会は、これまで、全国大会主題「豊かな心と実践力を育み、未来を拓く家庭科教育」を受け、研究主題を「学びを生かし、生活をよりよくしようと工夫する子供の育成」とし、家庭科教育に関する研究と授業実践を進めてきた。

当初、仙台市立愛子小学校、仙台市立錦ヶ丘小学校を会場としての授業と仙台市立南小泉小学校、仙台市立館小学校からの持ち込み授業の公開を予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、会場校への参集は避け、全体会場のトークネットホール仙台で、事前に録画した授業動画を公開し、指導助言をいただくこととした。

当日は、同会場で全国6ブロックの研究発表も行い、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官丸山早苗氏から全体指導をいただく。研究発表と全体指導の様子は、全国の参加者にオンライン配信する予定である。

また、東日本大震災から10年となったことから、大会前日の理事会後には、元石巻市立雄勝中学校長佐藤淳一氏による御講演を予定している。

生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することを目指す家庭科教育の在り方について、震災から10年を経た仙台の地から発信し、全国の先生方とともに研修を深める機会にしたいと考えている。

新型コロナウイルス感染は未だ予断を許さない状況にあり、難しい対応が求められる大会となっているが、現在、一丸となって大会開催に向けた準備を進めている。これまでに実施したことのない新しい形での大会運営となるが、感染対策を講じ、「チーム仙台・チーム家庭科」の力を結集し、「家庭科教育の学びを止めない」を合い言葉に、家庭科教育の充実・発展に寄与したい。

生活科・総合的な学習 東北大会

コロナ禍で行う東北大会

生活科・総合的な学習部会

部会長 森 直 (寺岡小学校)

これから社会の急激な変化による予測困難な時代を迎えると言われているが、新型コロナウイルスの感染拡大からも、時代の変化は既に始まっていると言わざるを得ない。

そんな中、令和2年度から本大会の運営について探ってきた。どこにも正解がない不安の中、他教科・領域で東北大会を控えている部会の校長先生方からいただく進捗状況や情報は大変貴重であった。

もちろん生活科・総合的な学習部会でも何度も話し合いを重ねてきた。参集型からオンラインでの開催、誌上発表から中止まで、ありとあらゆる形態を模索してきた。

最終的にコロナ対策をした上での一部参集型で準備を進めていくという結論を出す上で、令和2年12月に行った教育センター主催の「生活科研修」「総合的な学習研修」で見た、市名坂小の子供たちの学びの姿が私たちを後押しした。

新型コロナの影響で、これまで大切にしてきた人・もの・こととの関わりが困難な状況の中、先生方が工夫をしながら豊かな学びを創出していた。そのため学校として、地域や学校の特長を踏まえてダイナミックに教育活動を展開できるよう、生活科・総合的な学習の時間を要としたカリキュラム・マネジメントを推進していたことも大きな要因として挙げられる。

令和3年12月3日には、「未来社会の創り手として、主体的に考え地域と協働しながら社会的変化を乗り越えることができる子供の育成～生活科や総合的な学習の時間を要したカリキュラム・マネジメントによる探究する学びの展開を通して～」という大会主題を掲げ、この市名坂小学校を会場に東北大会が開催される。

児童下校後に大会受付を開始することや提案授業をビデオ撮影し、昼食時に視聴した上で午後の授業分析会に参加するなどのコロナ対策をとることとした。今後の感染状況によっては誌上発表も視野に入れているが、参会者にとって、学びの多い大会になるよう万全の準備を進めているところである。

提言

今日的課題に対応した
創意ある教育

古人の求めたるところを

第2地区会長 小石 俊聡(八幡小学校)

運動会の朝。体育主任を中心に、教職員が総出で準備に取りかかる。万国旗を張る者、テントを組み立てる者、ラインを引き直す者などそれぞれが、真剣にそして笑顔も見せながら作業をしている。

やがて子供たちが登校すると、学校全体は、高揚感と緊張感を合わせたような独特の空気に包まれる。だが、このような光景は、いずれ見られなくなるのかもしれない。

コロナ禍での学校生活が、2年目を迎えている。様々な行事や活動の実施については、工夫を重ねながらの学校経営が続いている現在。

こんな話を耳にした。「新型コロナの影響で見直した行事は、コロナ後に全てを元に戻すのではなく、成果があったものは継続すべきだ」。

確かにそのとおりである。これまでのやり方が、必ずしも正しいとは限らない。しかし、ここで言う成果とは、いったい何を指しているのか。

結果的にできたではないか。学年ごとの開催で、種目も減らし、子供たちの負担も減った。例えばこ

のような事実があり、それを成果だとする考え方もあるだろう。しかし、だからと言って学校全体での運動会が、否定されるべき話ではない。

運動会を例にしてみた。極端な例えかもしれないが、働き方改革という名の下にコロナ禍が加わったことで、「無くす・減らす」ことが大義とばかりに、大手を振って歩いている気がしてならない。

通信票の所見を書く。教材と格闘しながら指導案を書き授業をつくる。これらのことをやめたり軽く扱ったりすることで、失うものはないのだろうか。

大切なのは枠組ではなく「何のために」という視点であり、子供を教え育てるという教育の原点を忘れてはならないということである。

私たちは、芭蕉の「古人の跡を求めず 古人の求めたるところを求めよ」という言葉の意味を、改めて問う必要があるのではないか。先人の行ったやり方や結果を求めるのではなく、その人が、なぜそうしたのか、何を求めようとしたのか、その思いや志を大切にせよ、という意味を。

提言

今日的課題に対応した
創意ある教育

明日の子供たちのために

第4地区会長 丹野 伸裕(市名坂小学校)

元校長先生の著書の中に校長の心得として、以前こんな言葉を目にした。「野球のチームは一人だけ別の方向を見ている捕手がいる。学校チームは教職員が昨日と今日のことに追われている。しかし、校長はいわば捕手のように今日から明日を全体的に見て舵取りをしなければならない」(筑波大学院非常勤講師 金山康裕氏)

私は、校長を7年間経験してきて、日々山積する目の前の課題解決に追われるのが現状であったと振り返る。GIGAスクール構想、コミュニティ・スクール…。建設的な課題はよいのだが、コロナ対応、いじめ不登校、昨日のことを顧みなければいけない課題もいや応なしに押し寄せてくる。

そのような中、校長として見失わないように心掛けてきたのが、生きる力の育成と子供たちの成長、つまり「明日の子供たちのために」という理念である。本校では「未来を生きぬく 心豊かでたくましい子供の育成」を教育目標に掲げ、新学習指導要領の具現化に努めてきた。「地域に開かれた教育課程」

「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラムマネジメント」の実現を図るべく、学校づくりとの相関性を持たせ、生活科及び総合的な学習の時間の研究を進めているところである。

昨年度から奇しくも、新型コロナウイルスの渦に巻き込まれ、予測困難な時代に突入した。地域と思うように関われない、対話ができないなどの大きな壁が立ちはだかる中、探究的な学びの創造の実現に向け、教職員の様々な工夫が始まった。本年度は、GIGAスクール構想を生かし、情報の収集のみならず、整理分析や学びの履歴へ生かすことも試み始めている。

「明日の子供たちのために」を軸に、教育ビジョン形成し、校内外と共有、協働できる校長でありたい。今日から明日への紡ぎを大切にしたい。

提言

今日的課題に対応した
創意ある教育

聴き手を育てる

第6地区会長 門脇 恒明 (連坊小路小学校)

「聴き手のスキルを育てる教育」、退職を間近に控えた自分が今一番大切に考えている教育活動である。

数年前、ある恩師の誘いで新潟大学附属新潟小学校の公開授業に足を運び、目の覚めるような算数の授業に出会った。校長でありながら、「もう一度こんな授業がしてみたい」そんな気にさせられるほど衝撃的な授業だった。一人の子供が発言すると、すかさず全体が反応し、次から次へと論が展開されていく。賛成意見をエピソードを根拠にしながら語る子、途中で言えなくなった友達の考えを代弁する子、自分と異なる考えに対しては、その考えを理解し、評価した上で自分の考えを主張するアサーションを発揮する子。用意してきた答えを「いつ言おうか、いつ言おうか」とその出番を待つことだけに終始し、他の考えなど聴いていない子の多い授業（それはそれでかわいいが）とは全く別次元の「聴く姿勢」を重要視した授業だった。しかも、教師のファシリテーションが鮮やかだ。子供たちの対話が成立し始めると姿を消し、「ここで来るか!」というタイミングで、魅力的な課題を提示する。「拡散」→「収

束」,「拡散」→「収束」を繰り返し、最後には大切な授業の目当てを達成していくメリハリのある授業。「お見事!」と言う言葉しか当てはまらないほどのものだった。

自分の考えを表現させる教育活動はあれこれ試してきた。しかし、その成果は思ったほどでもなく、課題を感じていた時に、重要な視点を附属新潟小からプレゼントされた。「聴き手を育てることが、話し手を育てることに直結する」確かに我々大人でも聴き手が反応してくれれば、その表現力はみるみる向上する。その経験は誰しも味わったことがあるはずだ。

本校は、この対話スキルの獲得を研究の一つの視点として掲げ取り組んでいる。数年間継続して対話スキルの育成に取り組んできたノウハウを附属新潟小から直接教授いただき実践している。子供もそうだが予想以上に教師の力が向上している。「相手の考えを分かろうとして聴く」という対話スキルの概念を大切に実践を重ね、その重要性を次世代につなげていきたい。

学区紹介 地域とともに

秋保に伝わる三つのマップ

後藤 信博 (馬場小学校)

馬場小学校の西には、初夏のころまで山頂にうっすらと雪を残してそびえ立つ大東岳、南に目を転じると山肌には白さ極まる白岩、その下には、流々と名取川が流れている。学校の目の前の道路は、仙台から山寺経由で山形に抜けることのできる二口街道で、その道を西にまっすぐ進むと秋保大滝や磐司岩、二口溪谷がある。毎朝、校門の前で児童を待ちながら道行く車に頭を下げていると、様々な鳥の鳴き声と共に、はるか遠くから「カランカラン」というランドセルに付いている熊よけの鈴の音が聞こえてくる。馬場小学校の朝の風景である。秋保地区の自然の豊かさは、仙台市屈指であると自負している。その自然の豊かさに負けず劣らず、地域力に関してもすばらしいものがある。その一つのあかしとして、秋保地区には三つのマップが存在する。「秋保温泉旅歩きマップ」、「秋保民話マップ」、「秋保郷土かるた名所めぐりマップ」の三つで、馬場小学校の校長室にも飾ってある。それぞれのマップには、

磊々峽から磐司岩までが記載されていて、そこには、名所や史跡、その土地に伝わる民話や絵札などが色彩豊かに描かれている。この三つのマップ全てに「湯元小学校」、「秋保小学校」、「秋保中学校」、「馬場小学校」が載っている。秋保地区のそれぞれの学校の周りには、名所や旧跡、民話などが驚くほどたくさんあるのである。また、「大東岳四千尺 ふもとをもとの名取川」という歌詞で始まる土井晩翠先生が作詞した校歌は、秋保地区の小学校三校共通の校歌でもある。この校歌に象徴されるように、学校間での交流も大変盛んで、修学旅行や陸上記録会は、秋保地区小学校三校で、夏の職員研修は、秋保中学校区四校にあき幼稚園を加えて合同で実施している。このように幼稚園や中学校との連携もしっかりできているのである。この幼、小、中の既存の関係性を生かしながら、現在、秋保中学校区でのコミュニティ・スクールの在り方について検討を進めている。

自然豊かなこの秋保地区のすばらしさを誇れる心豊かな子供たちを育てていくために、保護者や地域の方々との連携を密に図りながら教育活動を進めていきたいと考えているところである。

学区紹介 地域とともに

今後も地域との連携を

大江 広 (虹の丘小学校)

虹の丘小学校は昭和61年4月、当時の泉市22番目の小学校として開校した。在籍児童数は340名。平成に入り530名を超える年もあったが、現在302名となり、35年前とあまり変わらない人数となっている。また、現在虹の丘居住の児童は全体の4割ほどで、およそ6割の児童はみずほ台、上谷刈居住である。開校時からの願いといえる校訓は「親切・勤勉・奉仕」である。校章は大きな輪を基調に図案化したもので、6枚の葉の形に見えるのは1年生から6年生までを表し、全学年が互いに手をつなぎ、学校全体が大きな夢を託した輪になるようにとの願いが込められている。



その学校・子供たちをバックアップして下さる体制も力強い。始業式入学式からすぐにそして毎日お世話になっている防犯ボランティアは30名ほどい

る。そして令和元年度に10周年を迎えた加茂中学校区学校支援地域本部といえば、虹小・加茂小・加茂中3校での年間活動日数はのべ500日、ボランティアのべ人数は2000人を超える年もあるほどだ。シニアクラブを中心とした地域清掃・環境整備活動には頭が下がる。子供たちが楽しめる活動としても、町内会組織による「虹の丘・みずほ台夏祭り」、虹の丘学区民体育振興会による「スポーツ・レクリエーション大会」、虹の丘コミュニティセンターの「コミセン祭り」など枚挙にいとまがない。

昨年から続くコロナ禍の影響で地域の方々による活動が中止や規模縮小など大きく制限されてきた。しかし3月まで学校トイレの清掃ボランティアは継続され、4月からは小1学習生活、読み聞かせなど各ボランティア活動が子供たちのために再開されている。学校とすれば感謝しかなく、とてもありがたいことである。それだけに学校としても地域へできる限り協力・還元していきたいと考えているが、どのようにしてどれだけのことができるのか、感染症対策についてまだまだ気の抜けない状況の中、模索し、連携を深められるよう取り組んでいきたい。

学区紹介 地域とともに

子供と地域の接点を大切に

星 恭典 (福室小学校)

本学区は、仙台市東部に位置しており、西は七北田川を隔て、はるか蔵王連峰を眺めることができる。学校は住宅や田園に囲まれた落ち着いた環境の中にあり、現在、開校52年目を迎えている。

本校は、開校当時から、たくさんの地域の方々や保護者の皆様から協力をいただきながら教育活動を行ってきた。現在も、町内会、PTA、防犯巡視員、スーパーバイザー、小1生活・学習サポーター、読み聞かせボランティア、民生委員など様々な方々から子供の学びを支えていただいている。

地域との関わりにおいては、まず学校に隣接している福室市民センターの存在が欠かせない。3年生の総合的な学習「福室の案内人になろう」では、地域の方をゲストティーチャーに迎え、学びの場を地域に移して学習活動を展開しているが、そのコーディネーター役は市民センターに担っていただいている。また、市民センターは、地域防災推進の拠点

でもあり、学校と連携しての地域防災訓練についても実施に向けた計画が進んでいるところである。

さらには、本校には「放課後子ども教室」が設置されており、週3日程度、地域コーディネーターの方々放課後に子供たちの学習支援を行っている。今年度は、約40名の子供たちが登録している。活動は校内ではあるが、そこでの関わりは、「子供」対「教師」ではなく、「子供」対「地域の大人」である。そういう意味では、学校の一部が「地域化」しているとも言えるのではないかと考えている。学校とはまた異なる関わりの中で、子供たちは1年間を通して学ぶことになる。そのような経験ができる子供たちを本当に幸せだと感じるし、関わっていただいている地域の方々へも改めて感謝をするところである。

今年度は、コロナ禍で昨年度に引き続き、地域との関わりにおいては十分な活動ができない状況にある。しかしながら、だからこそ、その大切さや意義を改めて感じている。本校は、これからも何ができるかを考え、家庭・地域と連携・協働しながら子供の学びを成長につなげるとともに、よりよい地域づくりにも貢献をしていきたい。

学区紹介 地域とともに

地域とともに歩む学校を
めざして

菅原 光敏 (若林小学校)

昭和29年7月、若林小学校は、南材木町小学校分校として開校した。そこで、問題になったのが校名だった。当時、学校の登記上の住所は、仙台市南小泉字広瀬川橋下92の40となっていた。住所のままならば、学校名は、広瀬川橋下小学校となる。いくら何でも橋の下の学校では、と言うことで、いろいろな案が出された。松原小学校案と古城小学校案である。しかし、どちらも譲らない。

学校沿革史は、校名由来を次のように書いている。本学区は俗に松原、古城と称する二学区より成っているが、この二地区を古くより若林と呼んでいた。この「若林」が藩祖伊達政宗公が晩年に築いた城の名として由緒あるものであり、しかも青少年の進歩発展を意味する言葉ともなるから、新設校の名として最もふさわしいものと考えられ仙台市教育委員会ではこの名を校名として選定したのである。

「若い林」という言葉には、たくましく成長してい

くエネルギーを感じる。明るい未来や計画的な将来を感じさせる言葉である。やがて、昭和42年の町名変更により、広瀬川橋下・桃源院東・五ッ谷の町名は、若林〇丁目に変わる。学校名に町名が合わせていくのである。

このように地域に支えられている学校である。象徴的な活動に、PTA主催の地域懇談会がある。地域の町内会会長、民生委員児童委員、交通指導隊員等地域の方々が集まり、子供の成長について話し合うのである。今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、参集せず御意見を集めた。次のような意見をいただいた。

「当町内会の子供たちは、敷地の中を元気に駆け回って遊んで居ます。今春入学したばかりの小一生ももうお友達になってキャッキョッキョッと笑い合いながら遊び回って居るのを見ると、こちらも元気になります。登下校の見守りをされて居る皆様、本当に御苦労さまでございます。」

地域に支えられ地域とともに歩む学校を目指している学校である。「若林」という校名に恥じないよう更に努力していきたい。

学区紹介 地域とともに

連携を維持できることに
感謝して

藤原 秀晃 (中田小学校)

大正天皇即位を祝って校門正面に植樹され、樹齢100年を超える3本の桜。カブトムシやクワガタを見付けることができる校庭の木々。仙台一長いと言われている約140メートルの廊下。昭和の関取、青葉城関は中田小の卒業生。子供たち、保護者・地域の皆様とともに歩んできた本校は、開校149年目を迎えた。

私が着任した令和2年4月は、新型コロナウイルス感染拡大による臨時休業、多くの行事や会合が中止・延期となり、児童はもちろん、保護者・地域の方と出会う機会が限られるという状況だった。着任後間もない4月18日の夜には、土砂災害警戒情報が発表され、避難所開設準備の連絡が入った。結果として本校は避難者もなく短時間での解除となったが、地域との会合がなかったとはいえ、少しでもいいから校長自ら連携をスタートさせておくことはできなかったのかと、学校に向かう車の中で自問し、反省したことを覚えている。

その後、PTA、町内会連合会をはじめとする関係

団体の活動が徐々に動き出す中で、保護者・地域の力、温かさを改めて感じる機会が増えていった。特に驚いたのは同窓会の活動である。開校149年目でありながら、毎年役員会を開催し、PTA、町内会と連携しながら学校の支援体制を維持なさっている。

中田地区は防災への意識も高く、担当課と町内会連合会が連携し、学校、市民センター、児童館、近隣保育所、包括支援センター等が集まった避難所連絡会も定期的に開催されている。大雨による避難所開設の可能性が高まりつつある昨今、町内会連合会による昨年度の防災訓練は、感染症対策という新たな課題にも対応するために、参加者を町内会役員と教職員代表に限定して実施された。学校との合同訓練は本年も見送りとなったが、9月に参加者限定で行うことが決まっている。

現在、児童の登校時に行う体調確認(検温)では、民生委員児童委員、地域住民の方の参加により、感染防止と教職員の負担軽減の両面で協力いただいている。多くの皆様による、学校を支える心と力に感謝し、そして、コロナ禍が落ち着いた後の地域連携も視野に入れて、校長として引き続き学校経営にあたりたい。

特色ある教育活動**平成の実りを、令和で新たな花に**

山根 斉 (南中山小学校)

本校は、昭和60年4月、泉市立南中山小学校として、長命ヶ丘小学校から分離して児童数366名で開校した。学校保健統計実施校、ボランティア協力校、ロボット実験メニュー開発協力校などの指定や表彰を受けてきた。冬の降雪には町内会から除雪機をお借りするなど、地域に永年支えられてきた。

1 地域等との連携した教育活動

本校は開校以来36年間、様々な人々との関わりを通して、子供たちを育ててきた。

- 光明支援学校小学部との交流学习は、平成6年から「どんぐり広場」と名付けて始まった。4年生が福祉に関する総合的な学習の時間の一環として交流活動を行ってきた。
- 近隣の高齢者施設との交流学习は、平成15年頃から5年生の学習として始まった。現在は3年生の地域との関わりを探る総合的な学習の一環として、交流活動を行ってきた。
- 近隣の幼稚園とは、入学前の年長児が本校を訪れ、1年生が生活科で作ったおもちゃで遊ばせるなどの活動をしてきた。
- 大学と連携したプログラミングの出前授業も3年生と5年生で行われてきた。3年生ではライトの点滅をプログラムしたLED制御教材「いろは姫」を、地域の夏祭りで展示していた。5年生は教育用ロボット「梵天丸」の動作のプログラミングを体験してきた。
- 児童会行事「南っ子スペシャルタイム」や縦割り活動をはじめ、運動会での6年生から5年生への「はねこ踊り」の伝承など、様々な形での異学年交流を続けてきた。
- 放課後子ども教室「マンサクキッズ」、読み聞かせボランティアなど、地域の方々が主体になって子供たちに様々な体験の場を提供していただいていた。

しかし、昨年新型コロナウイルス感染症の広がりに加え、2年間にわたる校舎改修で活動場所の確保ができないため、これらは一旦停止せざるを得なくなった。改めてこれまで続けてきた活動の意義を

痛感している。関係する方々と感染症対策を検討しながら、少しずつこれらの活動の再開の準備をしているところである。

2 南中山中学校区小中連携事業

南中山中学校区では、北中山小学校と本校と3校で、平成30年度から、9年間で育てたい子供の力として、「人間力」「集団力」「学力」の三つを設定し、3校合同の研修会を通じて共有してきた。「学力」については、読書の強化、見直し振り返りを重視した授業、家庭学習の習慣化に取り組んできた。「MKアップデー」と名付け、毎月21日をノーメディアで読書をする日に設定している。夏休みにはクロームブックを使った学習の進め方を共有するために、3校をオンラインでつないだ研修を予定している。

また、「人間力」「集団力」については、小中児童生徒合同会議を開き、「明るい学区にする共同宣言」として、「まこう挨拶の種」「育てよう心の芽」「咲かせよう笑顔の花」「実らせよう友情の実」を設定した。各校での挨拶運動も効果が表れ、「中学校の新入生は挨拶がよくできている」という声が出ている。また、児童生徒が地域に貢献できることとして、「南中山中学校区にど根性ひまわりの花を咲かせよう」のスローガンの下、学校園で育てることに加え、家庭や地域に種を配り協力を呼び掛けている。今年度は、感染症予防の各校の実践を、オンライン会議で紹介し合うことを予定している。

3 コミュニティ・スクールに向けて

本校独自で進んできた地域等との連携を改めて再編していくと同時に、定着し始めた小中連携の取組を、令和5年度から始まるコミュニティ・スクールにつなげたいと考えている。停止した地域連携には、感染症や校舎改修と関係なく、教職員に意義が共有されずに地域と認識の違いが生じたことによるものもある。子供は卒業後も大事な地域の後継者である。南中山地区を支えていく人材育成のために、身に付けさせたい資質・能力を、教職員と地域でしっかり共有したい。平成で得た地域連携の実りを、令和で新たな花にするべく思いを新たにしている。

特色ある教育活動

郷土の踊りと交流学習を通して、たくましい子供に

阿部 英徳 (福岡小学校)

1 はじめに

本校は、仙台市の北西部に位置し、明治6年に開校、泉ヶ岳の麓に広がる田園地帯を学区としている。今年度の児童数は33名で、保護者の送迎か路線バス等で通学している。共働きの家庭が多く、児童の多くは帰宅後、祖父母の世話を受けている。保護者や地域は、学校に非常に協力的で、PTA活動、地区子ども会育成活動も活発である。

2 特色ある教育活動について

(1) 鹿踊・剣舞の伝承活動

本校では、昭和50年から地域に伝わる民俗芸能鹿踊・剣舞を伝承している。鹿踊・剣舞は約380年前から伝えられ、宮城県・仙台市の無形民俗文化財に指定されている。鹿踊は、祖霊供養、五穀豊穡、天下泰平を願い神社などの祭で奉納されている。剣舞は、鎮魂の舞で、旧盆などに踊られてきた。



本校の教育目標は「心豊かな気力にみちた児童の育成」である。総合的な学習の時間、生活科、特別の教科道徳の年間指導計画に伝統文化教育のねらいを位置付け、郷土の伝統や文化を愛する心情や態度の育成を目指している。

総合的な学習の時間では年間約40時間4年生以上全員が伝承活動に取り組んでいる。4月から10月までは、4年生以上が地域の保存会の方々の指導を受けている。11月以降は6年生が師匠となり、3・4・5年生の弟子に指導を行うことで、児童相互の学び合いを大切にしながら学習を進めている。

練習日には、体育着姿の子供たちが腰に剣を差したり、太鼓を身に付けたりして準備を整え、正座して保存会の先生方を待っている。「これから練習を始めます。よろしくお願いします。」の挨拶のあと、保存会の方々の笛や太鼓に合わせて子供たちが太鼓をたたき、鹿踊を演じる。出番を待つ

剣舞の子供たちは整然と並んで正座し、仲間の踊りを見つめている。保存会との顔合わせの会では、「〇〇の孫です」と自己紹介をすると、保存会の方々に笑顔が見られる。練習を通じて礼儀作法や物を大切にする心が身に付くほか、子供同士で教え合うことにより、上級生が下級生の面倒を見る雰囲気が醸成される。

発表の場は年間数回ほどであるが、出演依頼を受けての披露も行ってきた。校内では学芸会、伝承活動引き継ぎ式、福岡夏まつり。校外では青葉まつり、冠のふるさと伝承まつり、老人ホーム慰問等である。コロナ禍のため、子供たちの発表の場がなくなり、昨年度は学芸会のみだった。今年度は感染対策を講じながら、子供たちの学び合いを止めないことを念頭において教育活動を進めることとし、運動会では校庭で鹿踊剣舞を発表した。

(2) 学校間交流事業

平成21年度より根白石小、野村小、実沢小(R3休校)と交流学習事業を行ってきた。小規模校の児童がより多くの仲間と関わり、学び合う機会を設けるための仙台市教育委員会の事業である。



今年度もコロナ禍ではあるが、野外活動や修学旅行の事前事後の交流学習を行い、一堂に会したりGoogle meetで交流したり、ふだんより多くの人数の中で、いろいろな考えを聞いたり、発表したりして、学びを深めることができた。

3 まとめ

子供たちは、福岡の鹿踊・剣舞を様々な機会に披露したり、交流学習をしたりする中で、自信を付けてきている。伝承活動を通して、地域の歴史や人々の思いに触れることが、将来の目標設定の基盤ともなっている。今後も様々な関わりを通して、しなやかにたくましく育ててほしいと願っている。

特色ある教育活動

新たなる学校文化の創造

伊藤 公一（幸町南小学校）

1 はじめに

学校専用の歩道橋がある学校、校舎と校庭が道路で分断されていて、学校の歩道橋によって校舎と校庭をつないでいる。全国でも非常に珍しい。このような形で、本校は、昭和62年4月1日、幸町小から分離し、78番目の仙台市立小学校として児童数450名、13学級で開校した。開校34年目を迎える。学区は東西1.3km、南北0.4kmと狭く、その中に高層のマンションや大型店舗が林立している。学校、PTA、町内会、体育振興会等の諸団体が中心となって活発に地域活動が行われており、地域住民の連帯意識は高まりを見せている。また、PTA活動が活発であり、令和2年度には文部科学大臣表彰を受けた。

2 特色ある教育活動

(1) 令和3年度重点事項

本校では「心豊かにたくましく生きる子どもの育成～笑顔あふれる学校、楽しい学校、みんなと共に成長する学校（笑楽校共育）～」という教育目標を掲げ、「学び合う子（かしこく）・助け合う子（やさしく）・がんばり合う子（たくましく）」を児童像とし、「笑楽校共育、地域とともに歩む学校、安全・安心・安定した学校」を学校像として目指している。また、今年度の重点事項として、次のことに取り組んでいる。

- ① 5つの「あ」（協働型学校評価）の励行
「安全」：ガイドラインに基づいた感染症対策の徹底
「朝」：早寝、早起き、朝ご飯等を意識した生活習慣の奨励
「挨拶」：明るく元気な挨拶の励行、児童会による挨拶運動等
「遊び」：外遊びの奨励
「ありがとう」：いじめ防止の取組や異学年交流等を通じた心の教育の充実
- ② 「リーダー・イン・ミー」の導入による、子供たちのリーダーシップの育成
- ③ ICT（あいして）るの推進
- ④ SDGs（持続可能な開発目標）への取組

⑤ 読書活動の推進

(2) 「リーダー・イン・ミー」事業

本校では今年度より3年間、財団法人フランクリン・コヴィー・エデュケーション・ジャパンの支援を受けながら、スティーブン・R・コヴィーの「7つの習慣」を基にした教育プログラム「リーダー・イン・ミー」に取り組んでいる。「リーダー・イン・ミー」とは、自ら考えて行動できるセルフリーダーシップ、他者と協働できるリーダーシップの両方を備えた人格を育むために「7つの習慣」を活用し自己肯定感を高め、生き方を学ぶプログラムである。教師・保護者・地域社会が連携し、子供たちのリーダーシップを育む学校文化を築くことを目標としている。

(3) 幸町南小学校運営協議会

昨年度から学校運営協議会の立ち上げを進めてきて、新型コロナウイルス感染症の影響もあったが、今年6月、幸町南小学校運営協議会を立ち上げた。立ち上げには学びの連携推進室の助言、支援を受けながら、学区関係諸団体、歴代のPTA代表、日頃から子供たちと接していただいている方々、元校長先生をメンバーに15名の委員で構成した。学校支援地域本部との連携・協働により、地域絵ぐるみでの教育を実現する仕組みができ、学校・家庭・地域が互いに役割理解・分担しながら、一体となって子供たちの成長に関わっていくことができると考える。

(4) ICT（あいして）るの推進

本校では、国のGIGAスクール構想を受け、昨年度より情報端末：chromebook、教育用クラウド：G Suite Educationに取り組んできた。シンガポール日本人学校とオンラインで結び基本的なアプリの研修を手始めに、「やるkey」や「キュビナ」「ロイロノート」研修など、様々な研修を行い、各種アプリの各教科での活用や教職員の情報共有や会議での使用など、児童も先生方も活用して覚える手法で進めている。今後もICTを活用し、より効率的で魅力的な活用を図っていきたい。

特色ある教育活動

歴史ある,地域に学ぶ教育活動

田中 孝子 (八本松小学校)

1 はじめに

本校は昭和43年4月に仙台市で44番目の小学校として誕生した。学区は仙台市の南東部に位置し、北は広瀬川に沿い、西はJR東北本線、東は国道4号線バイパスを境界としている。学区中央には広瀬河畔通りが走り、住宅やマンションが密集している。児童数は昭和57年度に1000人を超えその後は年々減少傾向にあったが、学区内の長町副都心化の整備事業が進み、それとともに交通の利便性が増したことから児童数が増加に転じている。

2 特色ある教育活動について

(1) 広瀬川を生かした学習

学校の北側を流れる広瀬川は、都市化が進む中であって、自然の清流をそのままに残しており本校の教育活動に限りない潤いと学習の場を与えてくれている貴重な教育資源である。



本校では、生活科や理科、総合的な学習の時間等を通して、全学年が広瀬川とその河川敷を活用した学習を行っている。低学年は、河川敷で四季折々の昆虫や植物などの観察をしている。中・高学年は総合的な学習の時間の中で、実際に広瀬川に入って水生生物採集活動や水質調査などの環境学習を行っている。その他にも、春には遠足、秋には持久走大会、冬にはそり滑りなど年間を通して広瀬川の自然を享受している。

(2) 聴覚支援学校との交流

学区内に位置する聴覚支援学校との交流は、昭和46年から始まった半世紀にわたる歴史ある活動といえる。本活動のねらいは、聴覚支援学校児童との交流を通し、思いやりの気持ちを持って互いに助け合い認め合える児童を育てることであり、今後も大切に継承していきたい教育活動である。

交流内容は本校児童会主催の「ちびっこまつり」に招待したり、陸上合同練習や学年交流を行ったりしてきた。児童だけでなく、職員間の交流も行っており、職員連絡協議会として年度始めに全職員、

年度末は代表者が参加して関係作りをしている。令和2年度は対面での児童間交流ができなかったため、それぞれの学年で模造紙にメッセージを貼り、手紙での交流を行った。



(3) 地域団体・人材との学び

①「社会を明るくする運動」八本松地区推進委員会

八本松地域は法務省が提唱する「社会を明るくする運動」のモデル地区に指定されている。

子供たちから標語を募集し、住民が言葉でつながることで、八本松がより明るく楽しい地域になることを目指している。



近年はこの活動を協働型学校評価重点目標「言葉でつながる～学校・家庭・地域の輪」に向けた全校的な取組の一つとして位置付けている。

②読み聞かせボランティア「松の実」

平成13年の出前お話会から始まり、それから20年もの長い期間児童への読み聞かせを続けてくださっている。コロナ禍の現在は事前収録した読み聞かせをテレビで放送している。昨年度末には卒業生に向けて「卒業おめでとうお話会」を開催。卒業生へのはなむけのメッセージを、絵本を通して熱く伝えてくださった。

3 おわりに

本校の特色ある教育活動は、地域の教育資源を生かしたものであり、長年大事に継承されてきたものである。とりわけ人材は豊かで学校支援地域本部を始め多くの団体が学校を支えてくださっている。

学校を取り巻く環境は日々変化している。地域の方々と丁寧に対話し、時代の変化に柔軟に対応しながら、歴代校長先生方が築かれ、大切に受け継がれてきた教育活動を今後も継続、発展させていけるよう、努力していきたい。

仙台市小学校教育研究会より

仙小教研の再スタートに当たって

仙台市小学校教育研究会 会長 村田 隆則 (国見小学校)

1 はじめに

仙台市小学校教育研究会は、会則第3条に「本会は仙台市小学校教育振興のため各部会の連絡提携をもとに、研究活動の推進を図ることを目的とする。」と掲げ、昭和39年3月から現在に至るまで仙台市教職員の研鑽の場を提供してきた。また、各部会長の校長先生方のリーダーシップの下で各種大会の開催を始め、部会独自の研修会、児童参加の各種展示会やコンクール開催など様々な活動を推進してきた。これまで各研究会が積み重ねてきた成果に感謝を申し上げたい。

2 今年度の活動について

昨年度は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、宮城県小・中学校長会長及び仙台市小・中学校長会長からの提言があり、年間を通して第一・第二部会とも教員の研修に関わる部分について、活動を休止することとなった。

今年度は昨年度できなかった教員の研修、児童参加の各種行事に各部会で力を尽くそうと準備を進めたところである。しかし、春先からの感染拡大によって、半年間活動を休止せざるを得ない状況となった。また、陸上記録会や音楽発表会など児童が参加する各種活動も中止となった。今年度後半に予定されている各種展示会やコンクールは、感染予防に配慮して実施を考えている。

今後ワクチン接種が進み、今年度後半には新規感染者が減少するのではないかと報道も出てきた。教員の研修については、今夏の感染状況を踏まえ、第2回全体会に向けた取組から再開を考えている。

新学習指導要領の完全実施から2年目を迎え、授業づくりをどうしたらよいのか、手探りで実践していた会員も多くいたと思う。今年度後半活動が再開し、様々な実践が紹介されることを通して、会員間で授業や指導方法のヒントが多く共有され、すばらしい実践の芽が出てくることに期待したい。

毎年夏に開催される教育文化講演会は、今年度本研究会が主管となって実施予定であったが、これも中止となった。共催いただく日本教育公務員弘済会

の皆様、講演者の内館牧子先生には中止の判断を快く受け入れていただき、心から感謝を申し上げたい。新型コロナウイルス感染症の影響を見通すことができない現状においては、令和4年度の講演会も中止の方向で考えている。令和5年度の再開を目指して、準備を整える予定である。

3 活動の更なるスリム化に向けて

市教研のスリム化は平成29年度から始まり、これまでに活動内容の精選、市教委との共催事業の実施など大きく七つの項目で前進が見られた。

教員の過酷な勤務実態が社会的に明らかになり、働き方改革が叫ばれ、新たに新型コロナウイルス感染症による対応を迫られる中、研究会の活動を更にスリム化して「教員の多忙化解消」「子供と向き合う時間の確保」と同時に「教員の学びの場の確保」を図っていきたいと考え、令和5年度より所属部会の一本化を図ることとした。これによって、全体会や常任委員会の回数が減り、学校運営に余裕が出るのが期待される。また、教員が子供と向き合う時間も増えることが期待される。各部会においては、年3回開催する全体会の在り方について見直し、会員に対して魅力ある研修内容を提案していくことが求められる。また、各部会長の校長先生を中心に今までの取組にとらわれない柔軟な考えで見直しに取り組んでもらいたいと考えている。

4 おわりに

仙小教研は、教員の指導力向上を目指しそれぞれの場面で学校の枠を超えた組織として、仙台市の小学校児童のために貢献し、互いに切磋琢磨する場を担ってきた。現場に若手教員が多く配置される時代になり、若手教員の学びの場を提供するとともに、学校文化や指導技術を伝承する場として仙小教研が果たす役割は今後ますます大きくなる。各部会においては、このような時代の流れをいち早く感じ取り、活動実践の活性化を目指してほしいと願っている。

退会者からのメッセージ

後輩に期待すること



「今」を紡いで

加藤 徹 (前 六郷小学校)

「土曜日にも授業があった」「巨大なワープロを風呂敷に包んで仕事に使っていた先生がいた」「バレーボール、野球、卓球等、季節ごとに職場対抗の試合があった」「職員旅行の宴会芸は一年掛けて仕込んだ」……。自分が教師として働き始めた頃の話をする、若い先生たちは信じられないという表情で、目を丸くして聞いています。彼らにとって、私の昔はそれだけ掛け離れた時代となっているでしょう。

同時に、長い教員人生の中で、社会も文化もテクノロジーも、人々の考え方も大きく変化していることを実感します。その変化に、十分対応し切れていない自分がいることもまた事実です。

一方で、若い先生方は極めて柔軟です。私ではとても使いこなせないものを難なく使いこなします。彼らは、テクノロジーに振り回されることなく、生活を豊かにするツールとして有効活用しています。昭和や平成初期にあった職場の文化に、よさや憧れを感じてくれています。

「今」の連続が歴史となり未来となります。これからの教育を担い、形作っていく若い世代の彼らに、学校という組織が紡いできた歴史を伝え、共に「今なすべきこと」を考えていくことが私たちに求められていることだと、今つくづく思います。令和の学校教育の発展を遠くから願い、祈り続けています。

止まない雨はない

花淵 浩司 (前 木町通小学校)

今はなき女川町立女川第一小学校を振り出しに、

市内8校での教員人生も残りわずかになった。研究指定校に勤務したときは、朝早くから夜遅くまで指導案作りをしたり、新設校に勤務したときは、先生方全員で校庭整備をしたり等、一瞬一瞬が昨日のことのように感じられ、あっという間の30数年間だった気がする。

私は、学級担任をやっていたとき、「明日、また学校(教室)に来たくなるような学級づくり」を心掛けていた。しかし、学級づくりに失敗し、私自身、心が折れそうになりかけたときもあった。そんな時私の心の支えになったのは、やはり子供たちであり、温かい上司や先輩、同僚だった。校長職も同じではないだろうか。即決即断、孤独、最終責任者、呼び方は違っても、「学校」にとって一人しかいない、しかも、替えの効かない職であることは間違いない。そのために、やはり校長会の「仲間」の支えは大きいものだと、退職する今になって改めて感じる今日この頃である。

「withコロナ」はこれからもまだまだ続くが、是非、仙台市小学校長会員が一丸となって、力を携え、学校経営を行えるよう、心から御祈念申し上げ、私は静かに去りたいと思う。

迷ったら

三浦 敏光 (前 向山小学校)

これまで校長として判断に迷うことが多々ありました。明日の運動会の実施可否、大地震や暴風雨への自然災害時の対応等、決断を迫られる場面がありました。さらに令和2年度のコロナ禍では、授業日の設定、授業参観・懇談会、卒業式や入学式、学習発表会の在り方など、校長として決断を迫られることばかりでした。

そんな時思い出すのは、大変お世話になった先輩

校長先生からの一言です。「判断に迷ったら、子供を真ん中に置いて決めるといいよ。」この言葉は、私にとって大切な判断基準となりました。子供を真ん中に置き、安全・安心な学校生活を過ごすことができるにはどうしたらいいかと考えると不思議に判断することができました。

これから学校経営をするに当たって、コロナ感染の収束後の生活様式や学校行事の在り方をはじめ、GIGAスクールの計画、さらには地域とのコミュニティ・スクール構想等、これまで以上に新たな難題が山積しています。判断に迷った時は、ふと立ち止まり、「子供を真ん中に置いて」を少しだけ思い出してください。

新しい杜の都の学校づくりに向かって、仙台市校長会の皆様のますますの御発展・御活躍をお祈り申し上げます。

非常時の際に求められるもの

堀江 孝浩（前 東仙台小学校）

東日本大震災を体験したあの日の夜、50歳の誕生日を四郎丸小の屋上で迎えました。校長先生と共に、澄み切った星空と仙台新港辺りの朱色の明さに戸惑いを覚えながら、今後の学校のことについて相談を進めたことが忘れられません。

あの時求められたのは素早い決断、震災直後の大混乱の中次々と判断を求められ、校長先生は私の考えを聞きながらも素早く判断を下していました。我々教職員はその判断に沿って行動するだけでした。その後の対応も同様で、様々な問題に教職員一丸となって取り組むことができました。

自分が校長となり校長としての判断の重さを実感するにつれ、素早い判断を下すことの難しさ、怖さを痛感しました。通常ならば時間をかけられますが、非常時には的確な判断を素早く下さなければなりません……。

校長としての7年間、何とか学校経営を進めてこられたのは、教頭先生との関係性が大きかったと感じています。何かあれば教頭先生に意見を求め、それと自分の考えを比べて判断する。その繰り返しの中で得られたものが信頼関係だと信じています。それは日常の学校経営でも大切にすべきものですが、

非常時には絶対に必要でありその有用性が発揮されるものと確信しています。

命と心を守る

佐藤 潤一（前 荒町小学校）

東日本大震災から10年がたちます。当時勤務していた学校は仙台市の北部に位置し、津波の被害は受けなかったものの、校舎や体育館の天井や壁が崩れ、校庭の地面には亀裂が入るなどの被害を受けました。雪の降る夕方から翌朝にかけて、子供たちの安全を確保し、なんとか無事に保護者に引き渡すことができました。隣の学校の教室をお借りし、教育活動が再開できたことを、今でも感謝しています。

学校再開後、家族や親戚が被害を受けた教職員や児童は、不安が大きくなるケースも見られました。この経験から、「心のケア」「安全・安心な学校」の二つは、学校経営の重要な柱と位置付け、これまで教育活動に取り組んできました。

校長としては、ふだんは明るく穏やかな雰囲気作りに努め、大事な局面で「責任と覚悟」を示せるよう心掛けてきました。最近では、地震や大雨などの災害、いじめ自死防止、コロナウイルス感染への不安など、「命と心を守る」重要な方針を示す場面がたくさんありました。迷うことも多くありましたが、周りの意見にも耳を傾け、最適な方策を探りながら決断してきました。そのような中、心強かったのは、小学校長会の皆様からいただいた御助言です。心から感謝申し上げます。

大変な時期だからこそ、「オール仙台、復興は教育の力で」を合い言葉に、会員皆様が御活躍されることを、陰ながら応援いたします。

感謝

古元 良和（前 上愛子小学校）

令和元年度と令和2年度は、学校の閉校と統合という貴重な経験をさせていただいた。作並小と大倉小が閉校となり上愛子小学校に統合された。統合元年はコロナ禍と重なり、子供たち、保護者はもちろん教職員も大きな不安を抱えてのスタートであっ

た。自然災害は、いつ、どこで起きるか分からない。東日本大震災から10年という節目の年に、また大きな余震が発生した。10年前、東宮城野小学校勤務時には、校舎を失った荒浜小学校の児童と教職員が校舎の半分を使って4月から生活することになった。児童も職員も余震におびえながら、日常を取り戻そうと精一杯努力をしていたことを思い出す。その後、岡田小学校でも勤務した。津波の被害が大きかった地域である。岡田の子供たちも地域の人々も、復興に向けて力強くたくましく、そして明るく前に進んでいた。私たちは、毎日大切な子供の命を預かっている。得てして災害は予想できるものとそうでないものがあるが、どちらの場合も校長として、迅速で的確でベストな判断が求められる。平常時は穏やかに、緊急時は何が起きても対応できるようにしておかなければならない。備えあれば憂いなし。どんな時にも、必ず手を差し伸べてくれる人、いつも応援してくれる人があることを信じて、今の災害を乗り越えてほしい。36年間お世話になりました。

「五つの管理」

八島 均（前 通町小学校）

「校長に求められる『五つの管理』とは何ですか」管理職選考試験の際の質問でした。答えられずにいると、面接官から「《人的管理》《施設管理》《予算管理》《事務管理》《教育課程管理》ですよ。覚えておくといいですよ。」とその場で教えてもらいました。

今思えば校長職として当たり前のことですが、意識するかしないかで、「いざ」という時の心構え、対応方針の決定、実際の対応が違ってくると思い、常に確認しながら勤務してまいりました。

平時の際には五つの管理業務はバランスよく順調に遂行されていますが、一たび有事となった際には、校長として、何を優先させて物事を判断し、実行するかがとても重要となります。東日本大震災の際は、第一に「命」、そして「施設」「教育課程」の管理を優先させました。近年の自然災害や新型コロナウイルス感染防止に際しても、人的管理の一つである命を守ることを、そして学習の保証をどのようにするかなど、校長に任された『五つの管理』をしっかりと

見極め、優先すべき順位を決めて丁寧に対処することが重要であると考えます。

結びに、これまで支えていただいた先輩方、そして同僚の先生方と共に仙台市の教育に携われたことに感謝申し上げます。そしてこれからの仙台市を支えてくださる校長先生方に御期待申し上げます。

校長先生方へのエール

佐藤 貢（前 宮城野小学校）

私は、震災後1年が過ぎ、全ての学校が復興に取り組んでいる、そんな時期に校長職に就きました。そのときの先輩の校長先生たちの熱量はすさまじかったこと、反面、私たち新任校長に対してはとても優しくあったことを今でも覚えています。生徒指導、人事、地域連携等、一から教えていただき、育てていただきました。こんな校長になりたいと、本気で思える先輩方ばかりでした。

あれから9年、昨年から続くコロナ禍での学校経営の中で、震災後の非常時での体験の記憶がよみがえってきました。

そんな今、思うのは、学校にとって大切なのは、いつの時でも子供の命と成長、教職員やその家族を守ることだということです。それは校長として持たねばならない基本理念であると考えます。

さあ、校長先生方、自信を持って学校経営に当たってください。子供の成長とそれを支える保護者や地域の頑張り、教職員の努力と成長を高らかに発信してください。そのための悩みや不安、苦しみの中から経験を積み上げ、校長としての地力を付けていてください。誰もがその道を歩んできました。

私はこれから校長先生方の一番の応援団として、ずっとエールを送り続けたいと思います。

Pay it forward

高橋 洋充（前 長町小学校）

「Pay it forward」という映画を思い出す方もいらっしゃると思います。日本語では「恩送り」と言う言葉に当てはめる場合があるようです。

「恩」と言えば、東日本大震災時、たくさんの方

に助けていただきました。東日本大震災時に限らず、女川での初任以来、たくさんの方々に恩を受けながら退職を迎えました。とてもとても恩返しなどできそうもありません。

「怒られているうちが花」と先輩に教えられました。最初は納得がいきませんでした。先輩と同じ年齢になった頃から、分かるようになりました。怒られることも、教えられることも、助けられることも、褒められることも、お酒をごちそうになることも実は「花」であり「恩」でした。

「恩返し」はできなくても「恩送り」はできます。私が特に頑張った「恩送り」は先輩にお酒をごちそうすることでした。そのために貯金もしました。感謝もされるので、積極的に「Pay it forward」に励みました。安易と言われても仕方ありません。

コロナ禍の中、安易な恩送りをする機会が少なくなっています。これまで受けた恩を別な方法で送る必要があるようです。それぞれの校長が、それぞれ得意な方法・領域で恩を送っていくことが、コロナ禍を乗り切るためには必要なことだと思います。

復興の日々を過ごして

八島 雅人（前 小松島小学校）

東日本大震災からちょうど10年。震災直後の4月、私は教頭として津波被災校に着任しました。校舎は使用できず、近隣の中学校に間借りしました。児童は4教室に分散、職員室は理科室、校長室は理科準備室でした。

学校再開後の業務、避難所との連携、救援物資や義援金、マスコミ対応、幼児学園の運営等で必死でした。昼間は元気に過ごしていても、夜は一人でトイレに行けない児童など、心のケアの難しさも感じました。前例のない多くの校長判断を目の当たりにし、校長の覚悟というものを痛切に感じました。「備えあれば憂いなし」の言葉が響きます。

その後、神戸市を始め、日本中から幅広い支援を受け、復興の形が少しずつ見えてきました。ある神戸市民の方々は、FMでチャリティへの参加を呼び掛け、1日かけて義援金を届けに来ました。その意識の高さに驚くばかりでした。私が被災地で感じた一番の復興は、「日常の学校生活」を取り戻すこと

です。そして、自分たちの「頑張ってる姿」を表現できるようにすることです。子供たちには、社会に貢献できる大人になってほしいと心から願っています。

最後に小学校校長会の皆様、苦しいときにたくさん助けていただきました。本当にありがとうございます。ますますの御発展をお祈りしております。

反省しきり

春日 文隆（前 原町小学校）

2001年9月11日、ニューヨークを恐ろしい出来事が襲ったことは記憶にまだ新しいことと思います。投資銀行サウンドビュー・テクノロジーでも、従業員の友人や親族に何人もの犠牲者が出ました。それを知ったリーダーのローアは、まず従業員全員に対して翌日会社に来るよう連絡しました。仕事をするためだけでなく、悲しみを分かち合い、今後のことを話し合うためです。それから数日間、ローアは涙を流す従業員たちを見守り、つらい気持ちを言葉に出すように勧めました。また、毎晩心情をつづった電子メールを全社員に向けて送信し、更に一步進めて、犠牲者への援助活動を通じて混乱の中から意味を見出す方策について全社員による話し合いを提案し、自ら指揮をとりました。

このように、ローアは社員の感情的現実には波長を合わせ、それを言葉で表明したのです。その結果、ローアが数日後に打ち出した方針は全員の心情を代表するものとなり、心の共鳴を生んだのです。

このエピソードから、リーダーに求められるものは、部下に対し心の共鳴を引き起こすことだと言えます。リーダーの言動は、部下の感情にインパクトを与え、仕事に対する意欲を高めるものとなります。したがって、リーダーは、自己の感情及び行動が部下の感じ方や仕事ぶりに大きな影響を与えることを自覚し、自分自身の感情をコントロールしなければなりません。

今、校長としての自分を振り返ったとき、どんなリーダーであったかと反省しきりです。皆さんには、集団に共鳴現象を起こし、職員の最善の資質を引き出すリーダーであってほしいと思います。

支えられ、助けられ、感謝

小野寺 東史 (前 郡山小学校)

郡山小学校の校長を2年間させていただきました。おかげさまで、多くの方々に支えられ、助けられて、なんとか学校運営を行って行くことができた、つくづく感じています。元気な子供たち、地域や保護者、同僚の教職員はもちろんですが、校長会の皆様には特にお世話になりました。今、学校は多種多様で複雑化、深刻化、専門化していく多くの課題を突きつけられ、これまでの経験や勘だけでは通用しなくなってきています。学校のリーダーとして求められる「迅速で的確な判断と指示」といったことがどのくらいできたのか。「校長の率先垂範」が教職員の心にどのくらい届いていたのか。教職員が方向を見誤らないように「先見性を持った学校改革の方向付け」がどのくらいできたのか。特に新学習指導要領の完全実施に伴う、教育課程の編成、働き方改革に伴うこれまでの業務の見直し、改廃と教育文化の継承、不測の事態であったコロナ禍の対応。また「若手教員の望ましい育成」はどうあればいいかなど、多くのことで思い悩みました。その度に校長会の皆様には相談し、適切な助言をいただき導いていただきました。心から感謝申し上げます。

百里を行くものは

小澤 守一 (前 立町小学校)

【百里を行く者は九十里を半ばとす】(ひゃくりをゆくものはくじゅうりをなかばとす)「百里の行程を旅する時は最後になるほど苦しいので、九十里で半分と考えるくらいにしないと無事に到達できない。何事をするにも、残り少しのところを気を引き締めないと失敗する。」という戒め。

まだ20代のころによくスキーに連れて行ってくださった1年先輩の先生から教えていただいた言葉です。当時は、若かったとはいえ、かなり遠出をして強硬なスケジュールで移動していたものですから、運転手をすることが多かった私に事故防止の意も込め声掛けしてくださったのだと思います。以来、仕事の面で年度末を迎えるたびに自分に言い聞かせ、

さらに近年、校長を仰せつかってからの数年間は3月の職員会議でこの言葉を紹介して職員へも注意喚起をしています。考えてみれば、東日本大震災もこのコロナ禍による休校等の深刻化の始まりも3月、年度末でした。本当に最後まで何が起こるか分からないものです。この原稿を書いている今は正に自分の教職生活の正念場。最後の最後まで気を緩めずしっかり締めくくりたいと頑張っているところです。

末筆となりますが、皆様方から頂戴いたしました御厚情に深謝申し上げるとともに、仙台市小学校長会のますますの御発展を祈念申し上げます。

人から学ぶ……。出会いに感謝！

佐藤 哲郎 (前 片平丁小学校)

東日本大震災発生するとき、私は教頭として市内小学校に勤務していました。子供たちの安全確保に努める一方で、体育館には次々に避難する地域の方が集まってきました。混乱しそうな中で、当時の校長先生は、職員に適切に指示を出し、パニックになりそうな子供たち、そして地域の皆さんの安全を確保することができました。そのとき、改めて感じたことは、校長のリーダーシップと日頃からの教職員との信頼関係の大切さ、そして地域住民との良好な関係づくりの重要性です。

奇しくも震災から10年後の今年度は新型コロナウイルスとの闘いの日々となりました。状況は違っても校長のリーダーシップが求められる点は一緒です。何を大切にするのか、優先すべきは何か。判断に悩むことも多々ありましたが、これまでに出会い、御教示いただいた校長先生方の姿、考え方を思い出しながら、対応に当たりました。

そして、今回の事態で何よりも心強かったのが校長会のつながりです。誰もが経験したことのない事態に対し、みんなが知恵を出し合い、子供、学校のために力を発揮する。そのような皆さんと出会い、一緒に過ごすことができ、本当に幸せに思います。

改めて感謝するとともに、皆様の御活躍を御祈念申し上げます。

「人」を大切に

佐藤 由美(前 台原小学校)

先輩たちが、自校の学校経営について語られる姿を拝見しながら「学校経営とは何だろう」「自分にはどんなことができるのだろうか」と考えてきました。校長職を終える今、振り返ると、私は「人」を中心に考えた学校づくりをしてきたように思います。

子供たちにとって魅力ある学校は、教職員が楽しく生き生きと動いている学校ではないかと思うのです。教職員が思いを共有し、目指す目標に向け共に進むことによって形になり、充実感と次への意欲が湧いてくる。最後の年、制限のある教育活動ではありましたが、その中でもできることを探り、工夫しながら新しいものを生み出そうとする職員集団の姿に、エネルギーとパワーを感じました。

目指す姿や戦略等の教育プランを明確にし、教職員のどんな力を、どこでどのように生かしていくのかを、私なりに考えてきました。「期待を込めて任せ、思いや考えを聞き、達成できるように支援する」教職員が主体的に動こうとする意欲を高めるために大切にしてきたことです。

学校が抱える課題は山積しておりますが、一つ一つ前に進むためには力の集結が大切だと思います。教職員の意欲を引き出し、思い描いた学校経営を推進されますことをお祈りいたしますとともに、多くの皆様に心より感謝と御礼を申し上げます。

「横のつながり」で 軽やかに時代を生きる

武田 早苗(前 柘江小学校)

この原稿を書きながら、これまでに御指導やお世話をいただいた先生方を思い起こしています。私は退職までの2年間を校長として過ごしましたが、何かを決断する時にはいつも先輩方や周りの校長先生方の実践を手本にして進んできました。ここ2年間は、新型コロナウイルスをどう防いでいこうか、とても悩みました。正解があるわけでもなく、大変不安でした。しかし、10年前の東日本大震災の時もそうでしたが、起きていることをしっかりと受け止めつつ、これからの時間をいかにして明るい方向へ

導いていくかが重要であり、そこに向かい、学校が先頭に立って動いていくべきと考えています。制限の多い中ではありますが、子供たちが充実感を味わいながら取り組める教育活動を生み出していく作業は、職員の参画意識や団結力を育むことに大いに役立ちました。そんな時に力強く後押しして下さったのが、先輩方からの御指導、校長会の先生方からいただく貴重な情報でした。校長として最終決断を下す重責はときに孤独に思うときもありましたが、今思えば、決して一人ではなかったと改めて感謝の気持ちでいっぱいになります。

これからの時代は、ますます「横のつながり」が大切になってくると思います。そして、情報を幅広く共有し、適切に受け取りながら困難な局面にも軽やかに対応していくことが求められていくことでしょう。まずは、校長がその姿を率先して職員や児童に見せていくことが、学校を大きく動かす力になると考えます。ぜひ希望を描ける学校を目指して御尽力ください。

これまで皆様から頂いた御厚情に深く感謝申し上げます。

雑感

佐藤 俊明(前 田子小学校)

朝、地域を歩くと、保護者や地域の方と児童との関わりが目に飛び込んできます。今年は、子供を励ましながら付き添って登校するお母さんが多かったように感じました。また、地域の方が、登校中にけがをした児童に手当てをされていて、そっと名乗らずに去って行くということもありました。

校長となって改めて、子供一人一人に保護者が思いを込め学校に送り出していること、地域の方々が子供たちのことを見守ってくださっていることを、強く感じました。

震災から10年がたち、復興公営住宅からも元気に登校している子供たちですが、様々な御事情を抱えている御家庭も少なくないのが現状です。そして、「心の復興」の取組が大切になるというときに、新型コロナ感染拡大という事態となりました。

このようなときこそ、子供たちの心に寄り添い、できることを進めてきました。特に、子供たち同士

の関わりを大切に、もつれた人間関係を、時間を掛け丁寧にほどく作業は、大切な教育活動でした。そして私にできることは、子供たち、保護者、地域の方々、教職員に、空元気な姿を見せることでした。

結びに、これまで御指導、御助言いただいた皆様に感謝申し上げるとともに、校長先生方のますますの御活躍をお祈りしております。

子供たちのために 頼る

三井 裕 (前 荒巻小学校)

地域を歩いて回っていると、防犯ボランティアや交通指導隊の方から決まって聞く言葉。「いつも子供たちから元気をもらっているよ。」コロナ禍であっても、変わらず子供たちが大人に元気を与える存在であることをつくづく感じます。

10年前の震災のときも、学校に避難されていた地域の方が卒業式の様子を涙ながらに感激して見ている姿を思い出します。私たちも、子供たちの元気な声やにこにこ笑顔、そして日々成長する姿に、教師としてのやりがいを感じています。

震災以降、子供たちの命と成長を脅かす出来事が増え、私は校長として様々な場面で決断に迷うことがありました。そんな時は、教頭先生はじめ教職員、地域の方、仲間の校長先生方など、周りの声に耳を傾けてきました。そして、困り事やお願いを素直に伝え、頼ってきました。一人一人の子供の成長と幸せのために日々学校経営を進めていることの理解が得られていれば、周りの人たちが必ず支援の手を差し伸べて助けてくださいます。

今後も、新たな教育活動の取組や経験したことがない事態への対応が求められることでしょう。「子供たちのために」を中心に据え、校内外の協力と支援を頼っていけば、大丈夫です。校長先生方が、元気で活躍されますことを心より応援しています。

子供を地域の真ん中に

齋藤 浩一 (前 長町南小学校)

今更ですが、子供たちは家庭や地域、そして学校で育ちます。それぞれに役割がありますが、それを

融合するのは「人々の思い」からです。教職員にそんな思いを持ってもらうのは実は至難の業です。特に校長になって身をもって感じました。「働き方改革」という言葉が出てきたら、ますます厳しそうです。

私は少年団やブラスバンドを担当したり、勤める学校や住んでいる地域の様々な事業に関わったりする中で、子供たちがその時々に見せる顔が違うのを見てきました。周りの大人の評価がそれぞれ違うわけですから、学校の中だけで子供を評価するのは危険です。

また、最近は様々な特性を持った子供が増えました。タイプ分けが細やかになり、これまで以上に個別の対応が必要になりましたが、学校は職員の数が足りません。一方、保護者は自分の子供のことは主張しますが、地域の子供については、あまり興味を持っていません。いじめや不登校の問題が取り沙汰されますが、今子供たちはどんな状況にあるのか、学校は何に苦しんでいるのか、何を頑張っているのかを共有することが大切です。今、学校支援地域本部を核としてたくさんのボランティアの方々为学校に入ってきています。どんどん学校の敷居を低くして、地域全体で子供を育てる雰囲気を作り学校が中心となり醸成していく必要はあると思います。自然災害に備える意味でも地域づくりは不可欠です。子供は地域の宝です。

託された使命

平山 勝 (前 南吉成小学校)

両親の安否確認のために、石巻市雄勝地区に入ったのが、震災発生から4日目の夕方。目の前に広がる故郷の惨状は、すさまじすぎて仮想空間に迷い込んだようにさえ感じたものです。

次々に明らかになる、両親や親戚、友人たちの生死。現実感情が追いつかず、被災地と自らの境遇とのギャップが苦しく、自らが被災していないことへの罪悪感さえ湧き上がっていました。

あれから10年。故郷は遅れていたかさ上げ工事が本格化し、全く別の場所になりつつあります。教育に携わる者として、自らの体験を基に震災・防災を語らなければ…という思いはあっても、言葉にまと

めることができずにいました。

最後の卒業式、推敲を繰り返した式辞の中に、自らの震災に関わる体験を控えめに加え、子供たちにメッセージを伝えました。特別なことは何一つ思い浮かばず、ありきたりの言葉でしたが「つながれてきた命を全うすることに大きな価値がある。」「生き方は多様であってよい。」

悲惨なエピソードに隠れがちな貴重な教訓を防災教育に生かしていくことと、これからを生きる子供たちに、「生きることの価値」と「つながれてきた命の重さ」を伝え続けていくことが、被災地の教員の役割なのだと、やっと思えるようになりました。

信頼される学校づくりに 不可欠な学級経営力

千葉 明 (前 南中山小学校)

50代の教諭が退職するに伴い、新規採用者数も増加している。そんな中、学力低下や学力の二極化など学力に関する問題やいじめ・不登校問題、さらに学級崩壊問題等々現場の課題は多い。特に、学級崩壊状態レベルではないものの、学級経営に苦しんでいるのは初任者だけでなくベテラン層にも波及している。

そこで、令和元年度に初任者指導第一人者である野中信行氏と北海道教育大学学校臨床教授横藤雅人氏をお招きし、学級経営セミナーを開催した。本校や近隣小学校から初任者層を中心に管理職の参加も得た。それぞれ講演後には参加者からたくさんの質問が寄せられるなど大盛況だった。野中氏は「学級経営には旬があり、3・7・30の法則をしっかりと徹底すること」と「縦糸と横糸を張ること(児童との関係づくり)」、横藤氏からは、「年度始めに指導すべき具体的事例」と「学級崩壊に至るメカニズムと隠れたカリキュラム」を中心に御指導いただいた。

地域から信頼される学校づくりには、良好な学級経営が不可欠である。担任と児童との信頼関係が構築され居心地のよい学級経営が実現できれば、いじめも少なく学力も高いことが報告されており、保護者も地域も安心して学校に通わせることができるからである。ぜひ担任一人一人の学級経営力向上に力を注いでいただければと願っている。

地域とのつながりの大切さ

白井 浩 (前 東長町小学校)

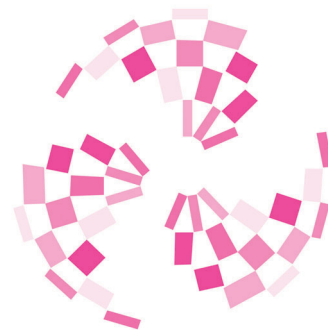
学級担任の頃は、社会科や総合的な学習の時間で、地域を教材化し、授業づくりに取り組んできました。そのとき、地域の方から言われたことは、「校長先生が地域と太い糸でつながりがあることも大切だけど、学級担任の先生方や子供たちが授業を通して、細くても糸が絡み合うようにつながっているのも大切だよ。」と教えていただきました。

校長になって、「地域とともに歩む学校」のために、地域とのつながりを自分自身がつくるとともに、学級担任の先生方と地域の人たちをつなげるコーディネーターの役をしてきました。学校が忙しくなるにつれて、学級担任の先生方が地域を歩いたり、直接地域の人から話を聞いたりして、地域を学ぶことが少なくなってきています。これから、コミュニティ・スクールなど、ますます地域とつながって、子供たちを育てていくことが重要になってきます。

そのためにも、子供たちが授業を通して地域の人たちと出会い、地域を学び、つながっていくことが求められていると思います。

地域と家庭と学校が強い信頼関係でつながり、地域の宝として、子供たちを共に育て、地域の人とのつながりが子供たちの「心のふるさと」となると良いなあと思って取り組んできました。

長い間、お世話になり、ありがとうございました。



新任校長所感

学校経営に寄せる思い



校長室で思うこと

齋藤 雅人（金剛沢小学校）

金剛沢は住宅地にもかかわらず、自然が至る所に残っており、ウグイスなどの野鳥の鳴き声が校長室にいても聞こえてくる。

着任して2か月がたつが頻発する地震や感染症への対応に追われ、なかなか落ち着かないのが現状である。新米校長が対応に右往左往しているそんな時、教頭先生や養護教諭らがいつの間にか現れ、私の迷いを吹き飛ばす活躍をしてもらっている。

一人で考えると見えてこないことも多くの目で見、様々な角度から考察することで解決への道筋が開けることがある。「校長だから決断しなければ。」と先を急がず、周囲に意見を求め、耳を傾けることを心掛けている。防災対応力が試される今、チーム学校の力でこの難局を乗り切る気持ちでいる。

開校47年目を迎える本校である。校長室に掲げてある歴代校長18名の写真を見ながら「先輩方も学校を守るため悩まれたのですね。」と独り言を言いつつ、日々職員室から飛び込んでくる課題・案件への対応を模索し、学校経営に取り組んでいる。

初心

宮崎 佳子（湯元小学校）

湯元小学校に着任して、まもなく3か月になります。校舎の前には庭園のような校庭が広がり、その向こうには緑豊かな山々と有名旅館の壮観な建物群が見えます。正に「仙台の奥座敷秋保温泉と共にある学校」とうなずける景観です。子供たちは、素直で伸び伸びとしており、休み時間は捕虫網とかごを持って虫取りに熱中しています。ユネスコ無形文化遺産の「湯元の田植踊」を高学年がしなやかにたくましく舞って伝承しています。これまでに経験したことのない、すばらしい特色のある学校に勤務でき

る幸せをかみ締める毎日です。

一方で、校長という職責の重さを初日からずっしりと感じました。子供たちと職員の命を預かる、学校を経営する、地域と手を携える……教頭職とのステージの違いに足下がくらくらし、心の落ちつき先を見付けるのに時間が必要でした。今は、じわじわと確実に自分に課されたもの、やるべきことが見えてきました。湯元小学校のために、毎日明るく元気にまい進していこうと思いを強くしています。

地域の方々の思いに支えられて

佐野 憲司（吉成小学校）

40年以上前の開校当時の資料から本校の校章が公募されていたことが分かり、同時に当時応募されたたくさんの作品が見付かりました。それらの作品それぞれには「世界に羽ばたいてほしい」「若葉のように新鮮であってほしい」「よい子であってほしい」など、子供たちが将来に向けて健やかに成長して欲しいと願う作者の思いが記されていました。そんな当時の地域の方々の思いを子供たちに伝えていくことも大切であると考え、開校記念日の話に織り込みました。

現在、地域の方々は、それぞれの思いを持ちながら実際に外部講師として子供たちを指導して下さったり、地域の見守り活動等の各種ボランティア活動を通して子供たちを支援して下さったりしています。こうした活動に心から感謝すると同時に地域にある学校として、長年にわたって支援して下さる方々や地域で見守ってくださる方々の思いの一つでも多く理解し、子供たちの健全な成長につなげていくことが大切であると改めて感じています。

コロナ禍の今こそ「人との関わり」を

千葉 元春（南吉成小学校）

4月、これまで支えていただいた多くの諸先輩方から、温かなメッセージや励ましの言葉をいただいた。感謝の気持ちが込み上げる一方、校長としての責務の重大さに身が引き締まる思いがした。

コロナ禍における学校経営では、感染防止のため正確な情報に基づいた的確な判断が校長として常に求められている。本校の協働型学校評価目標「人との関わりを大切にし、相手のことを考えて行動できる児童の育成」の取組においても、地域や保護者と関わる行事の実施が厳しい状況にある。しかし、工夫次第では可能となる活動もあり、校長として教職員一人一人のアイディアと実践力を引き出せるよう、機会を捉えて助言や声掛けに努めている。

開校30周年に向け、実行委員と教職員の協力の下、地域や保護者を巻き込んだ「学校の森整備」や学級ごとの「人文字撮影」等の企画は、これまで築いた伝統と人とのつながりに根ざしている。コロナ禍の今、人との関わりを大切にしようという大人たちの熱い思いを、未来を担う子供たちにぜひ伝えたい。

たくましく、しなやかに

菅澤 美香子（北仙台小学校）

ゴールデンウィークが終わった5月6日。連休明けは登校を渋る子がいるかもしれないと思いながら登校指導に向かいました。通学路で交通指導隊の方に「例年この時期は足取りの重い子がいるけど、今年はみんな元気だね。」と言われました。学校に戻ると、校庭では子供たちが友達と一緒に喜々として遊んでいる姿が目飛び込んできました。まん延防止等重点措置最中の連休はおうち時間が多く、子供たちは学校で思い切りエネルギーを発散しているかのようにでした。

コロナ前のことを考えると、窮屈で制約の多い学校生活ですが、子供たちの様子を見ると、彼らなりに学校生活をとても楽しんでいることが分かります。臨時休校を経て、先生や友達と関わることの楽しさを強く感じているようです。ペア学年で実施したわずか2時間の運動会でも、子供たちは一生懸命に取り組み、精一杯楽しんでいました。私も子供たち同様にたくましく、しなやかに学校のために歩みを進めていきたいと思えます。

一人一人が大切にされる学校

福田 幸信（小松島小学校）

小松島小学校に着任して3か月。毎朝学校に向かう子供たちの元気な挨拶と笑顔に力をもらい一日をスタートしています。そして、子供たちの安心・安全を守っていかなければと気持ちを新たにしています。

本校では「相手や場に応じた挨拶や優しい言葉遣いができる学校」を目指しています。まだまだ今までのような生活はできませんが、このような時代だからこそ人との関わりを大切にしていきたいと考え、学校・地域・家庭が一丸となって取り組んでいます。

また、多様性を認める児童の育成に努め、様々な環境に置かれている児童一人一人の良さを認めて伸ばすことに重点的に取り組んでいます。そのために校長として、教職員それぞれが力を発揮できる環境づくりが大切であると肝に銘じているところです。子供たち、そして教職員の一人一人が大切にされる学校を目指して、今後も力を尽くしていきたいと思えます。

見えてきたこと

毛利 雄一（枳江小学校）

着任してから約3か月、校長としての使命をどのように果たすべきかを考え、学校を運営していくことの重責を実感している毎日です。迷い、悩むことも多い日々の中で、同地区の校長先生方をはじめ校長会の諸先生方から丁寧な御指導や温かい励ましの言葉をいただき、感謝の念に堪えません。

今年度は感染症対策をしっかりと行いながら、子供たちの学びを止めることのないよう、教育活動を工夫改善して行うことに努めてきました。その中で5月に運動会、6月には修学旅行を無事に終えることができました。行事から学び、成長する子供たちの様子を改めて感じ取ることができ、大変うれしく思いました。同時に、これからは大人が対策を施すだけでなく、子供たち自身が自然災害を含めた様々な危機にどう対応していくかを考え、実践できる能力の育成が急務ではないかと考えるようになりました。正しく判断し、行動できる力を更に高めることを目指し、家庭や地域と連携しながら学校経営に取り組んでまいりたいと思えます。

地域で子供を育てる学校

玉水 修（西山小学校）

真剣な目で学習に取り組む雰囲気……

校庭で子供が元気に遊んでいる風景……

いろいろな制限が課せられる状況の中、西山小へ着任し、これまで当たり前のように思っていたことは、決して当たり前ではなく、かけがえのないものなのだと改めて実感しています。

西山小の子供は、ごく自然に当たり前のように朝の挨拶ができます。同じ通学路を歩く中学生も同様です。これらは、PTAや地域の方々、そして教職員が共に連携し、子供たちのよりよい成長のために思いを寄せ、これまで着実に育ててきたものだと思うようになってなりません。西山小は開校30周年を迎えますが、まさに「人がまちをつくり、まちが人を育む」という姿が具現化されていると感じます。

社会の中では、これまでとは違った新しい生活様式が確立していくと思います。今後も、全教職員を始め多くの人たちと共に力を合わせ、子供が安心して楽しく学び成長できる学校づくりに、全力で取り組んでいきたいと思っています。

教える楽しみ

麻生 信行（北六番丁小学校）

コロナ禍で様々な制約を受けながら教育活動が再開されて1年が経過しました。本校では、「学ぶ喜び教える楽しみ 笑顔あふれる楽しい学校」というスローガンの下、教師も子供も生き生きとしており、魅力ある授業が展開されています。このスローガンを着任して初めて目にしたときに「教える楽しみ」という言葉がすごく気に入りました。教師が教えることに楽しみを持つことで、子供たちの理解が深まり、学ぶ喜びが生まれてくると思います。

GIGAスクール構想、SDGs等、学校には新しい取組が求められていますが、子供たちだけでなく、教師も笑顔になれるよう、学校づくりに取り組まなければならないと感じています。

土井晩翠先生が作詞した校歌に「今日という日は今日かぎり むだに過ごしてなるものか」という歌詞があります。直筆の歌詞が校長室に飾られていますが、この歌詞を見るたびに、「笑顔あふれる楽しい学校」にするために真摯に取り組んでいるか、自問自答している毎日です。

海に一番近い小学校

熊谷 敬子（岡田小学校）

岡田小学校区には、五つの公園にそれぞれ巨大な津波避難タワーがあります。初めて地域回りで見た時、ここに津波が来ることを痛感しました。

本校には防災ルームがあり、震災時に全国の小学校から寄せられた応援メッセージが数多く飾られています。当時どのような被害で、どのように復興してきたかも写真などで分かる教室です。東日本大震災から10年。本校上学年児童は、海浜植物の再生を目指して関係機関と連携し、今年も海辺に「ハマヒルガオ」（花言葉きずな）を植えに行く予定です。

海に一番近い小学校は、今日も震災から復興しようとする地域と共にあります。毎朝、交通安全の見守り指導をしてくださる地域の方々には、荒浜から移転された方や中野小学区から避難された方もいます。地域の皆さんが子供たちを大事にしてくださるように、私も地域の皆さんを大事にし、避難所としての機能や感染症対策をしっかり果たせるよう見直していきます。そして、海に近くても一番安全な居場所を作っていきたいと思っています。

心に太陽かがやかそう

前川 武則（鶴巻小学校）

鶴巻小学校に着任して、学校中が子供たちの明るい挨拶で満ちあふれていることに感心しました。本校では、「鶴巻スタンダード」として、挨拶だけでなく、生活面や学習面での約束などを全校でそろえています。また、子供たち自身が、スタンダードを誇りに思い、上学年が下学年に伝えている姿が見られることは、本当にうれしいことです。校長として、このような子供たちや教師集団が、生き生きと学校生活を送れるようにしたいと強く思われました。

「生き生き」と過ごすためには、毎日が楽しくなければなりません。子供が毎日楽しく過ごすために、子供と日々向き合っている教職員の力量を向上させること、教職員一人一人が、学校経営に参画し、モチベーションを持って、過ごすことができるような職場環境をつくるのが校長としての役割だと強く感じさせられました。

本校の校歌に「心に太陽かがやかそう」という一節があります。教師も子供も心に太陽が輝く学校にできるよう努力していきたいと思っています。

いだ ～抱かれた学校～

村田 岳彦（松森小学校）

4月に松森小学校に着任してから、2か月余りがたちました。この間、私が感じているのは、学校が二つの大きなものに抱かれている、ということです。

一つ目は、豊かな自然。学校の全ての窓から校地周辺の森を臨むことができます。校長室から見える校庭南側の森からは、様々な鳥のさえずりが聞こえてきます。子供たちの情操を育む上で、自然環境に恵まれていることは大きな支えになります。松森小の子供たちの様子から感じるおおらかな校風は、緑豊かなこの地によるところが大きいと思います。

二つ目は、学校支援地域本部が活動をコーディネートする「まつさば隊」の存在です。登下校時の見守りや全校児童による米作り、読み聞かせ、松森夢塾など、他校ではあまり例を見ないほど、実に多くのボランティア活動が行われています。地域の方々の温かい心に支えられ、子供たちの安全・安心で豊かな学習環境が形作られていることへの感謝の心を念頭に、今年一年、教職員一丸となって学校経営に当たっていく所存です。

やさしい心 正しい心 勇気をもって

山澤 一郎（中野栄小学校）

前任の木村 浩校長が子供たちに、そして職員に残していった言葉です。中野栄小に校長として着任し、初めは戸惑う気持ちはありましたが、この言葉を胸に、子供たち、職員、保護者、地域の皆さんのために頑張っていきたいと思います。

さて、ある日、校長室の戸棚に過去のPTA広報誌を見付けました。そこには「二校二校の城」という記事があり、何だろうと思い、手に取ってみました。読むとすぐに分かりました。東日本大震災で被災した中野小がこの校舎で一緒に学んでいた時のことでした。二校二校はニコニコとかけたのでしょうか。児童会まつりは「二校二校まつり」として2校合同で開催されていました。ほかにもたくさんの交流が行われていました。当時の子供たち、職員の皆さんの努力を思うと胸が熱くなりました。震災後10年を経過しても、大切にしていきたい学校の歴史です。津波の避難エリアにある学校として子供たちに防災対応力を付けていくとともに、こうした歴史もしっかり伝えていきたいと思います。

関わり合い学び合う学校目指して

石橋 雅之（遠見塚小学校）

ある朝、1年生に「おはよう」と声を掛けると、「おはよう」という挨拶が返ってきました。そのとき、横を歩いていた6年生が1年生にそっと近付き、「校長先生には、おはようございますって言うんだよ」と優しく声を掛けてくれました。すぐに1年生は、6年生の言ったとおり「おはようございます」と言ってお辞儀をしました。私もすぐさま「おはようございます」と言い直し、笑顔で子供たちを迎え入れました。校門前でこのやり取りが、今も心に残っています。

本校では、「関わり合いを大切にする子供を育てる」を協働型重点目標とし、子供たちのコミュニケーション力の育成に取り組んでいます。以前から、たてわり活動を行っていることもあり、上級生が下級生と関わる姿を見ることは多く、日々関わり合いを通しての成長を実感しています。今後も、子供たちが関わり合い学び高め合える場面を増やしていくために、校長として様々な仕掛けを工夫しながら、学校経営に取り組んでいきたいと考えています。

「地域とともにある学校」と 「学校を核とした地域づくり」を目指して

田村 直也（蒲町小学校）

蒲町小学校は、東日本大震災の復興や地下鉄東西線の開通に伴い、都市化が進み、今では800人を超える若林区で一番大きい学校になりました。

その子供たちを支える保護者、地域の方々はとても協力的で、いろいろな形で学校をサポートしています。赤エプロンの小1生活・学習サポーターが、1年生がスムーズに学校生活を送れるようにサポートしています。茶エプロンのスクールサポートスタッフが、校舎内の消毒作業に当たっています。防犯ジャンパーの防犯ボランティアが、子供たちの登下校の安全を見守っています。様々な学校支援ボランティアの皆様との関わりは、子供たちだけではなく、私たち教職員にもかけがえのないものになっています。

今仙台市では、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動との一体的推進、すなわち学校づくりと地域づくりを一緒に進めていくことを求めています。コロナ禍で活動が制限されますが、子供たちのために、地域の方々と今までの取組をつなぎ、更に先に進めていきたいと思いを強くしているところです。

学校経営に寄せる思い

川村 美智（東宮城野小学校）

勤務校は、通常学級6クラスと特別支援学級1クラスの単学級の学校です。通常6クラスの担任のうち4人は20代で、更にそのうち3人は新卒2年以内という非常に若い職員構成です。

着任し、学校経営を考えた時にまず最初に頭に浮かんだことは、子供たちに自立に向けた力を付けさせることとともに、教育を次の世代につなぐための若い教員の育成の必要性でした。

近年は学校に期待される役目が多岐にわたり、教員に求められる能力も年々高まっていると感じます。そのような中であっても、教職を自らの使命と選んだ若者を、次の時代を担う本物の教員として育てなければならぬと感じました。本校の若手は、教員として何を大切にすべきかの芯がしっかり通っている、意欲あふれる人材です。その意欲を損なわないためにも、子供が生き生きと学ぶ魅力ある学校づくり、更には先輩教員が生き生きと働く姿を示せる学校づくりを実践したいと考えます。大きいけれどやりがいのある学校経営に挑戦していきます。

安心感のある学校

伏見 滋（東四郎丸小学校）

毎朝の学区巡視で閑上方面へ向かう車から「教頭先生！」とよく手を振られます。見慣れた顔と出会いはほっとします。同じ袋原中学校区の「隣の小学校」へ転任を命ぜられ3か月が過ぎようとしています。

私の校長としての初心は「安心感のある学校」をつくることです。全ての子供たちが安心して学べる学校。保護者が毎朝安心して子供を送り出せる学校。

そして、教職員が安心して自分らしさを発揮しながら働ける学校です。しかし、長く続くコロナ禍、生徒指導上の諸問題等、正直、毎日が不安です。「安心感のある学校」の実現には「おらほの学校」への愛着が強い地域の皆様と協働し、百戦錬磨の先輩校長の皆様からの御助言を生かしながら学校経営を進めていくことが肝要であると考えています。

校長室の窓から入る浜風に海の近さを感じます。東日本大震災から10年。先輩方は学校危機管理における貴重な教訓と知恵を残してくださいました。それらの継承は校長の重要な責務であると強く自覚しています。新米校長は明日も学区内を歩きます。

諸先輩方からのお言葉

小崎 功二（郡山小学校）

これまでお世話になった諸先輩方から、多くのお言葉を頂戴いたしました。

「謙虚、誠実」他人を批判せず、身近な人への礼儀を忘れず、自己顕示を控え、虚飾を廃すること。「想像力」行動言動の前に、招く結果を予想すること。「覚悟」立場、職責を深く自覚し、問題から逃げないこと。「誠意」心の真ん中にいつも優しさを持って相手に接し、何よりも自分に恥じることをない行動をすること。「感謝」全てにありがたいと感じる心を失わないこと。「自由」自由とは放らつと同義ではない。誰かに言われなければ人の痛みや迷惑を想像できない人間は、管理されるしかなくなる。自分で自分を管理する本当の「自由」を獲得すること。

いただいたお言葉を心に留め、微力ながら職務に精励してまいります。これからも御指導御鞭撻いただきますよう、お願い申し上げます。

編集後記

東日本大震災から10年を迎えた今年、「廣瀬川」も、100号という節目を迎えることができました。この積み重ねの一つ一つに携わられた先輩方に敬意を表します。

さて、昨年度から続くcovid-19感染症対応のため、新しい生活様式の下での学校生活、工夫しながらの学校行事の実施、子供たちの心のケアにどう対応するべきかなど、新たな課題に直面しながら対応に当たられていることと思います。

先生方からいただいた記事からも、子供たちのためにいかに日常を取り戻すか、「安全」「安心」な学校をどう作っていくか、日々困難な決断に迫られながらも、学校や地域の特性を生かし、保護者、地域の皆様と連携しながら学校経営に努められている様子を拝察することができました。

まさに、今年度の編集テーマである「防災対応力の育成と今日的課題への対応をともし未来を切り拓く児童を育む学校経営」について、それぞれ各学校で日々御努力されている姿を読み取ることができました。

最後になりますが、お忙しい中、原稿執筆に御協力いただき、私たちを導いてくださった退職校長先生方、担当の校長先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。（100号チーフ 阿部 記）

編集担当者：阿部 謙（東仙台小） 工藤良幸（南光台東小）